

村落＝於ケル結核豫防工作ノ實驗

大阪府泉南郡樽井村

伊 阪 春

目 次

第一章 緒 言	第二節 體溫ニ關シテ
第二章 AO 豫防接種開始前ノ狀況	第三節 一般住民ノ健康狀態
第三章 AO 豫防接種實施	第四節 村内殘存結核患者
第四章 AO 豫注後ニ於ケル情況	第五節 結核性新患
第一節 感冒ノ罹患者減少	第五章 結 論

第一章 緒 言

最近我國ノ衛生狀態ハ幾分良好ニ向ヒツ、アリト雖、急性傳染病ノ發生數多キコト、結核死乳幼児ノ死亡其他一般死亡等ノ高率ナル、世界文明國中第1位ヲ占ムルト云フガ如キ恥ズ可キ狀況ニ在ルコトハ一般ニ周知ノ事實デアル。更ニ農村ニ於ケル是等ノ狀態ガ一層甚ダシク不良デアルコトハ誠ニ痛嘆ニ堪エナイ次第デアル。近時國民體位向上ノ必要ガ朝野ノ間ニ盛ニ論議セラレ、保健衛生施設ガ現内閣ノ重要ナル國策トシテ擧ゲラレテ居ルコトハ遲時ナガラ我が意ヲ得タモノト云ハナケレバナラナイ。歐洲大戰後我が國ハ漫然「インフレ」景氣ノ波ニ乗ツテ、當然來ル可キ不景氣ノドン底ニ沈ミ、中小商工業者ハ云フニ及バズ、農山漁村等全國津々浦々迄モ疲弊困窮ヲ來タシタコトハ、吾等ノ坐視スルニ忍ビナイモノガアル。從ツテ各種ノ救濟事業ガ次ギカラ次ギヘト要求セラル、様ニナツタコトハサモアル可キコト、云ハネバナラヌ。更ニ現下ノ國際情勢ハ國防ノ充實ヲ1日モ忽ガセニスルコトヲ許サナイ。議會ニ於テ膨大ナル軍事費ガ通過シ從ツテ増稅ハ萬已ム得ナイ當然ノ結果デアル。而シテ物價ハ益々騰貴スル一方デ農村ノ疲弊ハ彌ガ上ニモ激シクナル。眞ニ非常時難局ニ直面シテ居ル。故ニ吾等ハ農村ニ於

ケル自力更生策ヲ講ジナケレバナラナイコトハ自然ノ理デアル。而シテ自力更生ハ何ヨリモ健康第一主義デナケレバナラナイ。即チ治療醫學ヨリモ豫防醫學ニ全力ヲ傾注シ所謂健康村ノ建設ニ務メナケレバナラヌコトハ云フ迄モナイ。事實農村ニ於テハ乳幼児ノ死亡率ハ勿論、一般ノ死亡ニ於テモ高率ヲ示シ、結核性疾患ノ蔓延、寄生蟲ノ慘害、榮養狀態ノ不良ナル等、總テガ想像以上ノモノガアル。故ニ本村ニ於テハ此ノ見地ヨリシテ社會事業モ保健衛生施設モ是等ノ點ニ全力ヲ注イデ居ル。即チ、(1)乳幼児ノ保護、(2)妊産婦ノ保護、(3)榮養改善、(4)寄生蟲ノ驅除 (5)結核ノ豫防、(6)學校衛生ノ充實等ヲ以テ主眼トシテ居ル。

乳幼児ノ保護事業トシテハ已ニ昭和2年以來農繁期託兒所ヲ開設シテ今日ニ至リ。同時ニ兒童ニ榮養食ヲ支給シテ相當ノ效果ヲ擧ゲテ居ル。是レハ文部省ノ學校給食令發布以前デアル。更ニ乳幼児及妊産婦ノ保護ヲ目的トシテ昭和9年以來『コドモ愛育會』ヲ組織シ母子健康相談妊婦ノ檢尿、産具ノ消毒ヲ行ヒ、且母性ニ育兒看護法等ノ知識ヲ附與スル目的ヲ以テ『母親學校』ヲ開設シ毎月1回産婦人科及小兒科専門醫ノ講演ヲ聽講セシメテ居ル。更ニ農繁期ニ於テハ乳

幼兒農繁期保育所ヲ設ケ、且工場労働者ノ爲メニ常設託兒所ノ開設ニ迄達シテ來タ。而シテ「コドモ愛育會設立以來、乳兒ノ死亡ハ驚異的ナ減少ヲ示シテ來タコトハ後ニ説クガ如クデアル。次ギニ榮養改善ノ目的ニハ學校及ビ託兒所ニ於テ榮養生ヲ支給シ、又講習會及ビ「パンフレット」ノ配布ニヨリテ榮養知識ヲ普及シ、昭和11年農繁期ニハ大阪府衛生課ト共同主催ニテ共同炊事ヲ實施シテ相當好成績ヲ舉ゲテ居ル。寄生蟲ノ農村ニ於ケル蔓延ハ實ニ驚ク可キモノガアル。從ツテ學童及村民ノ檢便ヲ實施シテ村內各種團體主催ノ下ニ年數回寄生蟲ノ驅除ヲ行フテ居ル。

學校衛生ノ充實ニ就テハ特ニ兒童ノ保健問題ニ意ヲ注ギタル結果、昭和11年文部省ヨリ學校衛生優良校トシテ表彰セラル、ノ光榮ニ浴シタ。

次ギニ結核ノ豫防問題デアルガ、是レハ至難中ノ至難デアル。文化ノ進展スルニツレ農村ノ青年子女ハ都會ヘアコガレテ進出スル。而シテ結核ニ感染シテ歸郷スル。農村ハ所謂結核處女地タルノ故ヲ以テ猛烈ナ勢ヲ以テ蔓延スル。斯クシテ農村ハ最近都會以上ニ結核ノ浸襲ヲ受ケテ居ル。本村ニ於テモ最近稍々減少ノ傾向ヲ示セリト雖、年々多數ノ患者ガ續出シテ居ル。結核ハ實ニ農村疲弊ノ重要ナル役割ヲ務メテ居ル。故ニ之レヲ驅逐掃蕩スルニ非ズンバ眞ノ健康

村建設ハ不可能デアル。吾人ハ結核豫防週間其他機會アル毎ニ村民ニ對シ講演又ハ「パンフレット」ニヨリテ此ノ恐ル可キ傳染性亡國病ノ豫防ニツキ注意ヲ喚起シテ來タ。併シナガラカ、ル手ヌルキ消極的手段ニヨリテハ何ノ效果ヲモ擧グルコトヲ得ナイ。相變ラズ新患者ハ次々ヘト續出スル。從ツテ是レガ對策ニツキ考慮中ノ處、偶々大阪府社會事業聯盟發行『社會事業研究』(昭和10年9月號)誌上ニ於テ醫學博士有馬賴吉氏ノ『農村衛生問題對策』ナル論文ヲ讀ミ、結核豫防ニ對スル前途ニ光明ヲ認ムルコトヲ得タ。依リテ直チニ村長深見仁衛門氏ノ贊同ヲ得、有馬博士ヲ訪問シ、結核ニ對スル積極的豫防方法ヲ聽取シ、遂ニAOヲ以テスル豫防接種ヲ村民全體ニ實施スルニ至リ、昭和10年10月第1回翌11年2月第5回ヲ完了スルニ至リ、吾等年來ノ目的タル健康村建設ヲ實現セシメ得ルノ機運ニ到着セリ。而シテ接種終了後滿1ケ年半、患者ノ發生狀況等ニツキ觀察シ、其ノ結果大イニ見ル可キモノアルヲ以テ茲ニ之レヲ報告シ敢テ同憂ノ士ノ參考ニ資セント欲スルモノデアル。

余モトヨリ淺學菲才且田舎ノ開業醫ニシテ日々公私ノコトニ煩ハサレ精細ヲ盡スノ暇ナク、且觀察不充分ニシテ當ヲ失スルノ點モアラン。切ニ今後ノ補正ニ俟タント欲ス。

第二章 AO 豫防接種開始前ノ狀況

樽井村ハ大阪府泉南郡ノ中部ニ位シ、大阪灣ノ東岸白砂青松風光明媚ノ地デアルガ、地方獨特ノ纖維工業(主トシテ足袋裏用紋羽)ガ盛ニテ、一村ニテノ村內ニ大小二十有餘ノ工場ガアリ、村民ノ過半ハ工場經營者及ビ之ガ從業者デアル。我國ノ全結核死亡率ハ人口萬對20ヲ上下シテ居ルノデアルガ樽井村ニ於テハ昭和6年以降ノ5ケ年間ニ於テ第1表ノ如キ數字ヲ示シ實ニ寒心ニ堪エザルモノガアル。

昭和8年5月、村內全學童473名ニツキ2000倍舊「ツベルクリン」ヲ以テ皮內反應ヲ試ミタルニ、弱陽性27人、中陽性84人、強陽性19人、計130人(27.48%)ノ陽性者ヲ見タ(詳シクハ「結核」第14卷第10號昭和11年10月號參照)。上記報告ニ於テ余ハ「ツベルクリン」皮膚反應ヲ以テ舊來ノ慣習ニ從ヒ、漫然結核感染ノ標準ヲラシメント欲シタルガ、其ノ際詳細記載セルガ如ク、該反應ノ發現ハ兒童ノ保育狀態、既往ノ病

第 1 表 樽井村昭和 6 年以降 5 箇年間に於ケル人口動態及ビ乳兒死亡並ニ結核死亡調査

年次	種別	人口	出生	總死亡數	乳兒死亡(%)	全結核死亡	備考
昭和 6 年		3.697	103	74	27(26.2)	27(73.0)	乳兒死亡率ハ生産 100ニ對シ全結核率ハ人口萬對トス 昭和 10 年 10 月ヨリ AO 豫注
同 7 年		3.709	132	82	26(19.5)	22(59.0)	
同 8 年		3.803	121	59	14(11.6)	18(47.4)	
同 9 年		3.964	153	100	25(16.3)	16(40.0)	
同 10 年		4.329	135	65	22(16.2)	27(62.3)	

歴、體力標準(唯胸圍トノ關係ノミ例外)、發育概評、病氣缺席日數等並ニ最後一有熱者トノ關係等ヲ調査シ、何レモ「ツベルクリン」皮膚反應ノ陰性陽性ト何等特殊ノ關係アルヲ見ザルノミナラズ、一般の狀態ニ於テハ其ノ良好ナル兒童ニ於テ、不良ナル者ヨリモ陽性者多キ結果ニ達シタ。仍テ惟フニ本反應ハ少ナクトモ學童ニ在リテハ其ノ陽性者必ズシモ結核感染者タル標識トシテ信憑スルニ足ラザルモノナルカ。就中所謂虛弱兒童ニ於テ陽性者却テ少ナキハ一層此感ヲ深カラシムモノガアル。此ノ點ニ關シ醫學士西川濠氏(醫海時報 2187 號昭和 11 年 8 月)ガ同様ノ疑問ニ到達シ、有馬博士ノ所見ヲ質シタルハ、余ノ同感ヲ禁ゼサル所デアアル。次デ昭和 10 年 10 月全村民中ノ希望者及ビ學童ノ全部ニ向ヒ、AO 豫注ヲ開始セントスルニ當リ、村民 2482 人ニ對シ大部ハ問診及身體検査、一部分ハ問診其他ノ方法ニヨリ、其ノ健康狀態ヲ調査シ、次ギノ結果ヲ得タ。

健康者 1907(特別ナル記載ナキ者 58 名ヲ含ム)
 虛弱者 445
 結核性疾患ノ既往症アル者 94
 結核患者(喘息ヲ含ム) 19
 他ノ疾患ニテ醫治ヲ受ケツ、アル者 7
 此所ニ結核性疾患ノ既往症アル者トハ肺炎「カタル」肋膜炎並ニ慢性氣管枝炎等ヲ經過セルモノデアアル。然シ上記 94 名中當時已一何等ノ自覺症狀ナク業務ニ従事セルモノハ僅カニ 18 名ニ過ギズシテ、他、76 名ハ皆所謂虛弱者以上ノ病狀ヲ有スルモノデアツタ。
 更ニ又既ニ余ノ「ツベルクリン」皮内反應成績報告ニ於テ學童中ニハ平日體溫 37.0°C 以上ヲ示ス者甚ダ多キコトヲ記述シタガ、今回 AO 豫注ヲ開始セントスルニ先チ、再ビ兒童 350 人ニ就キ嚴密ニ體溫ヲ測定セルニ其内 192 人即チ 55% 弱ノ者ニ於テ、37°C 以上ノ體溫ヲ示スヲ見タ。之ガ詳細及ビ AO 豫注後ノ變化ニ就テハ後ニ記述スル。

第三章 AO 豫防接種實施

昭和 10 年 10 月有馬博士ノ來村ヲ得、全村有志ノ會合ヲ求メ一場ノ講話ヲ聽取セル後直チニ大部分ノ健康狀態ヲ診査シ、治療ヲ受ク可キ者ト豫防接種ヲ受ク可キ者トノ二班ニ區別シ、豫防接種ハ毎月 1 回連續實施シテ昭和 11 年 2 月第

1 次至 5 回ヲ大體完了シタ。治療ヲ受クル者ハ自分ニ於テ適當 AO 並ニ其他一般療法ヲ加ヘタ。斯クテ豫防注射並ニ治療關係ニ於テハ村民 2693 名デアツタ。

第四章 AO 豫注後ニ於ケル情況

既ニ緒言ニ於テ述ベタルガ如ク樽井村ニ於テハ種々ナ社會事業的施設ヲ持ツテ居ル。從ツテ以下記スル所ノ事實ヲ全部 AO 豫注ノ影響ニヨル

モノナリト斷ズルコトハ失當デアアルカモ知レナイ。其ノ邊ノ取舍ハ識者ノ判斷ニ一任スル。兎ニ角記述ノ方法ハ昭和 10 年 10 月 AO 豫注開始

以前ノ情況ト其ノ以後ノ現象及ビ情況トヲ主トシテ比較觀察シタ。出來得ル限り事實ノミヲ記載スルニ止メヨウト思フノデアアルガ、又止ムヲ得ズ幾ラカノ批評若シクハ考察ヲモ加ヘタ。

第一節 感冒ニ罹ル者ガ著減シタ

是レハ接種ヲ受ケタ村民ニ在ツテハ全體の著明ナ現象デアアルガ、ソレヲ明カニ數字ヲ以テ表ハスコトハ困難デアアル。然シ學校ニ於テハ之ヲ明カニ言フコトが出來ル。即チ AO 接種 3 回ヲ經過シタル昭和 10 年 12 月大阪府下全體ニ流行性感冒襲來シ、學童ノ罹患缺席スル者非常ニ多ク、タメニ休校スル學校續出シ、府當局ヨリハ罹患狀況ノ連續報告ヲ命ゼラレ、毎 10 日ニ患者數、經過、全快者數等ヲ報告セルガ、樽井校ノミハ患者極メテ少ナク、殆ンド平日ト變化ナキ出席狀態ヲ保ツタ。此ノ現象ハ樽井村ノ接近村等ニシテ既ニ AO 接種セル所ニ在ツテモ同様デアルト傳ヘラル。流感ト AO 接種ニヨル抵抗力ノ増加ト如何ナル關係ニ立ツヤハ姑ク措キ、其ノ後ノ狀況ニ由ツテ見ルモ流感以外ノ感冒モ著減セルヲ以テ AO 接種ノ好影響タルハ疑ナキト思惟ス。

第二節 體溫ニ關シテ

一般ニ感冒ニ罹ル者劇減セル結果、以前微熱ヲ有者若クハ感冒熱ヲ發シタル者ノ減少セルコトハセシ疑ナキ所ナルモ、村民一般トシテ之ガ統計的調査ヲ遂グルコトハ困難ナル事情デアアル。然シ感冒ト同ジク學童ニ就テハ數年來毎學年ノ初メニ於テ全學童ノ檢溫ヲ實施シ養護上ノ參考トナシ來ツタ。其ノ情況ニ關シテハ昭和 8 年度ノ調査ヲ「ツベルクリン」皮内反應調査ト共ニ結

核第 14 卷第 10 號ニ記述報告シタ内ノ A 校ト記シタノガ樽井校ノ實狀デアアル。

今ソレヲ拔粹シテ見レバ、昭和 8 年春 3 日間連續檢溫ノ結果ハ第 2 表ノ如キ成績デアツタ。

第 2 表

性	年 齡 別	検査人員	37.0°C以上ノ者(%)
男 兒	7—11歳	191	99(51.83%)
	12—14歳	71	11(15.49%)
女 兒	7—11歳	147	76(53.9%)
	12—14歳	47	5(10.63%)

我が地方、即チ田舎ノ村ニ在ツテモ有熱兒童ハ非常ニ多ク其ノ平均體溫ハ 37°C 以上ニ達スル(後述参照)。而シテ此ノ有熱兒童ト「ツベルクリン」皮内反應トハ、必ズシモ一致シナイガ、「ツ」反應強陽性者ニハ持續的有熱者ガ認メラレタガ、小兒結核ト有熱兒童トヲ結びツケテ考ヘルコトハ疑問トシテ居ツタ。其後吉田章信博士等(體育研究 3 卷 2 號學校衛生第 15 卷 12—13 號)ノ業績ヲ讀ムニ及ビ、其ノ説ニ左祖シ、結核トハ深キ關係ナキモノトスルニ至ツテ居タ。上表ニヨリテ見ルガ如ク、吉田博士ノ言ハル、通りデ、事實 7—11 歳ノ學童ノ平均體溫ハ 37°C ヲ越シテ居ル場合が多い。從ツテ學童ノ平均體溫ハ 37.2°C 迄デアルトスルコトが正當デアリ、37.3°C 以上ノナツテ初メテ病的デアルト見テヨイト考フルニ至ツタ。

然ルニ昭和 10 年 10 月 AO 豫注ヲ行ヒ、其後モ時々檢溫ヲ施シタガ、昭和 11 年 4—7 月ノ間、大阪朝日新聞社社會事業團派遣看護婦高木はるえノ盡力ニヨリ、各兒童一ツキ 5 日間連續的ニ檢溫シタ結果、意外ノ成績ガ現ハレタ。即チ第 3 表トナツタ。

第 3 表 昭和 11 年度 5 日間連續檢溫成績

性 別	検査人員	5日間唯一回 37°C以上(%)	2回以上 37—37.2°C	2回以上 37.3°C以上	5回共 37.3°C以上	5回共 37.4°C以上
男	271	48(17.71%)	18(6.64%)	6(2.21%)	0	2(0.72%)
女	251	52(20.72%)	17(6.77%)	3(1.2%)	1(0.40)	0

即チ一見シテ高體溫ヲ有スル者ガ劇減セルコトヲ氣附クノデアアル。仍テ平均體溫トシテ昭和 8 年度連續 3 日間檢溫セルモノト比較シテ見ルト

次表ノ如クナル。

即チ昭和 11 年度ノ檢溫ニ於テ數年來曾テ見ザル成績ヲ得タ。

第 4 表 昭和 8 年度連續 3 日間及ビ昭和 11 年
5 日間檢温成績

性別	年齢	平均體温	
		昭和 8 年	昭和 11 年
男	7	36.90	36.73
女	7	37.29	36.60
男	8	36.91	36.64
女	8	36.81	36.73
男	9	37.10	36.79
女	9	37.11	36.72
男	10	36.89	36.81
女	10	37.11	36.61
男	11	37.03	36.68
女	11	36.42	36.61
男	12	36.73	36.78
女	12	36.69	36.71
男	13	36.82	36.72
女	13	36.66	36.66
男	14	36.42	36.72
女	14	36.34	36.71

於此自分ハ復タ考ヘサセラレタ。

1. 吉田博士ノ云ハレルガ如クニ健康兒童ノ常温ハホントウニ $37^{\circ}.0-37^{\circ}.3^{\circ}\text{C}$ デアルノデアロウカ。
2. 田舎ノ子供ト都會ノ子供トデ常温ニ多少ノ差異ガアルノデアロウカ。
3. 樽井校デハ年々 37°C 以上ノ體温ヲ示ス兒童ガ多カッタ。或ル人ハ通學距離ノ大ナル兒童ハ午前中稍々高體温ヲ示スト言ツタガ、樽井校デハソレハアテハマラス。何故ナラバ樽井校ハ一村一字デ通學ノ爲メニ體温ガ昇ル程ノ距離ハ無イ。而シテ AO 注射後兒童ノ一般状態ガ佳良トナツタト同時ニ、殆ンド全部ノ兒童ガ 37°C 以下トナツタ。外ニハ體温ニ影響スル程ノ施設ハナクシテ、ソレ迄ハ毎年 37°C 以上デアツタ兒童等ガ既ニ 2 ケ年連續シテ 37°C 以下ヲ示シテ居ルコトカラ觀レバ、矢張り 37°C 以上ハ病的體温デアツテ結核ト何等カノ關係ガアルノデハナカロウカ。一步進ンデ自分ハカウ言ツテミタイ。ホントウノ健康兒童ノ常温ハ矢張り 37°C 以下デアラネバナラス。從ツテソレ以上ノモノ

ハ病的ト見テ可イ。微熱ハ結核ト關係ガアルヤウニ思ヘル。

第三節 一般住民ノ健康状態

住民全般トシテ健康状態ガ著シク良好トナツタコトハ非常ニ感謝セラレテ居ルガ、ソレヲ數學的ニ説明スルコトハ困難デアル。前述感冒ノ減少シタ如キモ其ノ現象ノ一ツデアル。又健康状態ノ改善セラレター端トシテ本村小學校教員ノ勤務状態テ AO 豫注前ト其ノ後トヲ比較スルコトガ出來ル。小學校教員ハ昭和 9 年ニ職員數 11 名ニシテ延日數 52 日ノ缺勤アリ、同 10 年ハ職員數 11 名ニシテ延日數 35 日ノ缺勤アリ、同 11 年中ニハ職員數 11 名ニシテ僅カニ 9 日ノ缺勤日數デアル。其ノ内 1 名 8 日、1 名 1 日ト云フ記録的缺勤減少トナツタ。此ノ缺勤日數ハ各年共病缺以外ノ事故缺勤ヲモ含ムノハ勿論デアル。同様ノ關係ハ昭和 10 年 12 月以降 5 回ノ AO 豫注ヲ受ケタル泉南郡教員會員 400 名ニ於テハ既ニ顯著ナル現象トシテ喧傳セラレテ居ル。同教員會員中ニハ AO 豫注以來長期缺勤者ハ完全ニ其ノ跡ヲ絶ツタト云フコトデアル。

村民健康状態ガ優良トナツタ證左ノ一トシテ、殊ニ乳兒死亡ノ減少ニヨル總死亡數ノ減少ヲ舉ゲルコトガ出來ル。昭和 6 年ヨリ同 10 年ニ至ル 5 ケ年間ノ乳兒死亡ハ平均 22.8 人ニシテ、生産 100 ニ對シ平均 18 弱ヲ示シタガ、昭和 11 年ニ於テハ僅カニ 9 名ニシテ生産 100 ニ對シ 7.6 トイフ稀ナル好結果ヲ見タ。總死亡數モ人口ハ増加スルニ逆比例シテ約半數ニ止マツタ(第 5 表參照)。

住民一般ノ健康状態ガ改善セラレタコトガ、徴兵検査ノ成績ニ如何ニ影響セルヤヲ見ヤウト欲シテ調査シテ見タ。徴兵検査ハ身長ニ大ナル關係ガアルカラ、必ズシモ健康状態ノ示標トスルコトハ出來ヌカモ知レヌガ、或ル土地デハ AO 豫注ノ後大イニ合格率ガ佳良トナツタト聞イテ居ル。樽井村ニ於テハ昭和 6 年以降ノ成績ヲ示セバ次ノ如クデアル。即チ適齡受檢者ノ成績ヲ甲ト乙、丙ト丁ノ二種ニ大別スレバ、昭和 9 年

第 5 表 樽井村昭和 6 年—12 年上半期人口動態及ビ乳兒並ニ全結核死亡調査

	人 口	生 産	總死亡	乳兒死亡(%)	全 結 核 死	備 考
昭和 6 年	3.697	103	74	27(26.2)	27(73.0)	結核ハ人口萬對比
同 7 年	3.709	132	82	26(19.5)	22(59.0)	
同 8 年	3.803	121	59	14(11.6)	18(47.4)	
同 9 年	3.964	153	100	25(16.3)	16(40.0)	昭和 10 年 10 月 ヨリ AO 開始
同 10 年	4.329	135	65	22(16.2)	30(69.0)	
同 11 年	4.436	118	47	9(7.6)	10(22.5)	
同 12 年					4	上半期ノミ

ノ稀ナル好成绩ヲ除ケバ、今昭和 12 年ハ最優良ノ成績デアル。

第六表 樽井村過去 7 ヶ年徴兵検査成績

	受験壯丁	成 績			
		甲	乙	丙	丁
昭和 6 年	26	14(53.9)		12(46.0)	
„ 7 „	32	18(56.5)		14(43.5)	
„ 8 „	40	25(62.5)		15(37.5)	
„ 9 „	34	26(76.5)		8(23.5)	
„ 10 „	36	26(69.3)		11(30.7)	
„ 11 „	30	20(66.6)		10(33.3)	
„ 12 „	30	23(76.1)		7(23.9)	

第四節 村内残存結核患者

昭和 12 年 5 月末現在村内ニ残存シテ治療ヲ要スル結核患者 9 名アリ、其ノ中 AO ニ關係アルモノ 4 名ナリ。2 名ハ 5 回豫注完了、2 名ハ唯 1 回ノ豫注ニ出席シタルノミ皆 AO 開始前ヨリノ患者デアル。残り 5 名中帶患移住者 3 名 AO 開始前ノ患者 2 名デアル。

AO 豫注開始前治療中ノ患者 19 名アリシコトハ既ニ述ベタ。今ソレ以後 20 ヶ月間ノ觀察ニ

ヨリ、死亡残存患者ヲ調査シテ 13 名ヲ得タ。即チ豫注開始前ノ患者 6 名ハ此間ニ於テ治療シ、550 人ノ虚弱者及既往症所有者カラモ唯 1 人モ死亡者及ビ新患者ヲ發生セナカツタ。

第五節 結核性新患

上記 2 項ニ記述セル本村結核 14 名ト現在患者 9 名合計 23 名中帶病移住者 5 名アリ、AO 開始前ヨリノ患者 16 名デアツテ残り 2 名ハ腦膜炎死デアツテ、即チ眞ノ村内發生ノ新患者デアル。然シコノ 2 名ノ腦膜炎死者ハ共ニ AO 豫注ニハ關係が無イ。若シ最初全部ノ住民ニ AO 豫注ヲ施スコトヲ得タナラバ、コノ犠牲者ハ出デナカツタト思ハレル。當時村内分子ノ事情ハツレヲ許サナカツタコトハ遺憾デアル。要スルニ 2800 名ニ近キ AO 豫注者カラハ 20 ヶ月間ニシテモ未ダ 1 人ノ結核性新患ガ發生セヌ。單ニ是レノミヲ以テシテモ AO ノ價值ハ十分デアルト思フ、況ンヤ更ニ卓越セル治療ノ效果アリ、既存ノ患者若クハ所謂治療前期ノ患者モ極メテ多數救済セラレ、天賦ノ健康ヲ取りモドスコトヲ得タルハ感謝ニ餘リアルモノデアル。

第五章 結 論

村内ニ多數ノ塵埃多キ纖維工場ヲ有シ、村民ノ大部分ハソレニヨツテ勞作生活シ、結核死亡率甚ダ高く、多數ノ虚弱者及ビ患者ヲ擁シタル一村ニ於テ、村民ノ大部分ニ對シ AO ヲ以テ豫防及ビ治療工作ヲ加ヘ、開始以來 20 ヶ月ノ觀察ニヨリ從來ノ方法ニテハ決シテ見ルベカラザル成績ヲ得タ。

1. 豫注ヲ受ケタル者ヨリハ結核性疾患ノ發生ヲ見ナイ。
2. 村民一般ノ健康状態ガ著シク改善セラレ他ノ内科的疾患殊ニ感冒ハ著シク減少シタ。
3. 村内ニ少數ノ既存患者ト帶患移住者トヲ残スノミトナツタ。
4. 結核死亡者及ビ乳兒死亡者著シク減少シ

タ。

5. 以上ノ事實ハ當ニ余ガ居村ニ於テノミナラズ、余ノ關係セル附邊數ケ村ニ於テモ皆同様ノ工作ニヨリ略々同様ノ結果ニ達シ若クハ到著セントシツ、アリテ、其ノ成績ハ例外ナキモノト思惟ス。

尚ホ樽井村ニテハ昭和11年頃ヨリ毎月1回結核相談所ヲ開キ 虛弱者及ビ希望者ノ診査ヲナ

シ、新患者發生ノ防止ニ努メツ、アリ、現在ノ状態ヲ持續スルト共ニ、更ニ優良ナル健康状態ヲ實現センコトヲ期ス。

稿ヲ終ルニ臨ミ多量ノ高價ナルAOヲ快ク無償供給セラレ、且多數ノ所員諸君ト共ニ屢々親シク應援ヲ賜ハリタル有馬頼吉博士及有馬研究所員各位ニ對シ村長深見仁右衛門氏ト共ニ村民ヲ代表シテ厚ク感謝ノ意ヲ表ス。